

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	23222003	研究期間	平成23年度～平成27年度
研究課題名	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築	研究代表者 (所属・職) <small>(平成28年3月現在)</small>	關 雄二 (国立民族学博物館・民族社会研究部・教授)

【平成26年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)		
<p>本研究は、半世紀にわたる我が国のアンデス考古学の成果を継承するとともに、権力論という視点と分野横断的な手法を導入することにより壮大な文明研究を復興しようとする野心的な試みである。プロジェクトの開始以降、研究代表者らは精力的に研究を推進している。その成果が最も顕著に現れているのはマイクロレベルでの研究である。パコパンパ遺跡での精緻な資料分析は国際的にも高い評価を得ており、今後も十分な成果が期待できる。これに対してメソ、マクロレベルでの研究は現状では主に研究集会の開催に留まっており、やや物足りない。今後は査読付国際学術誌での論文発表等を通じて、3つのレベルを統合するような成果が出てくることを期待する。</p>		

【平成28年度 検証結果】

検証結果	
A	<p>当初目標に対し、期待どおりの成果があった。</p> <p>当初目標であるマイクロレベルの分析を基に、メソレベルの複合社会成立過程の追究と、その上に人類史における文明形成というマクロレベルを追求するという野心的な目標に向けて期待どおりに進展している。</p> <p>具体的には、パコパンパ遺跡の中心軸の延長線上に農耕の開始のしるしとなるスバル（プレアデス星団）の出現地点が位置するという知見、被葬者の頭蓋変形から階層分化が推測されるという知見などが興味深い。</p> <p>研究進捗評価後に刊行された『古代文明アンデスと西アジア 神殿と権力の生成』（2015、朝日選書）はマクロレベルでの追及の提起として、一般向けの広がりとともに深化の方向の提示となり得ている。</p> <p>また、国際的なシンポジウム等を通じた発信、研究成果の認知も図られている。</p>